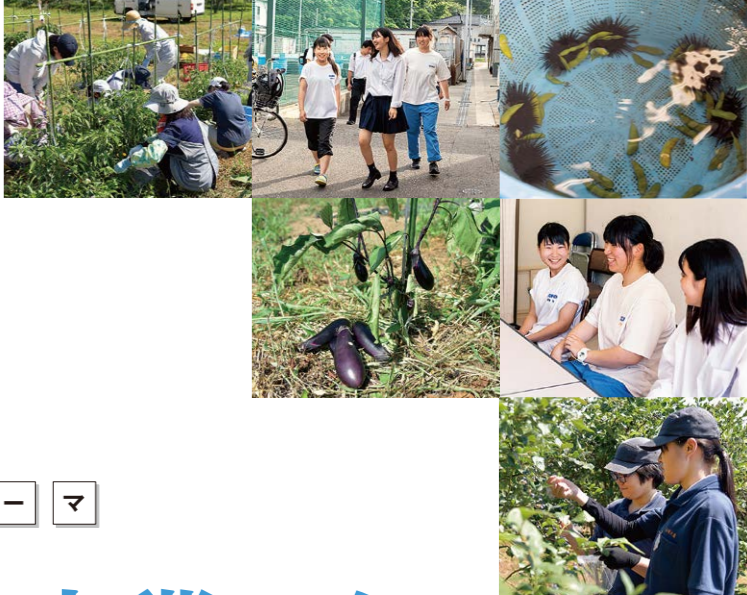




(左から)渡會円さん、高橋七海さん、本間麗華さん。失敗談も交えながら、終始笑顔で取り組みについて聞かせてくれた。

海と畑をつなぎ、  
新たな庄内の特産品を。

Cradle  
高校生編集部が行く  
**スゴハイ** 21  
SUGOI high school students in Shonai  
Supported by  
庄内広域行政組合、山形県庄内総合支庁



取 材 テ ー マ

# 一次産業から 地域の将来を考える 高校生

より豊かに安心して暮らしていくために、  
自分たちが学ぶ漁業や農業には何ができるか。  
生まれ育った地域と改めて向き合い、考え、  
「課題研究」に取り組む高校生たちを紹介します。

## 加茂水産高校

季節ごとの恵みで、私たちが楽  
しませてくれる庄内の海。しかし、  
庄内のウニを食べたことがある人  
は、あまりいいのではないだろ  
うか。

「実は、ちょっと潜ればこの辺り  
でもウニはたくさん獲れるんです」。  
庄内のムラサキウニをテーマに課

題研究に取り組む加茂水産高校の  
3年生、渡會円さんは言う。雑食  
ではあるが、多くの場合は昆布な  
どの海藻を食べて育つウニ。海藻  
が豊富な場所では大きくおいしく  
育つが、庄内にはそのような「藻  
場」がほとんどなく出荷できるよ  
うなウニにはならないという。こ  
れが、私たちが庄内産のウニを食  
べたことがない理由だ。「試しに  
食べてみましたが、身がスカスカ



さん。今年は新たに、食味や身の  
肥大化への影響、他の餌での育ち  
方についても研究していく予定だ。  
課題研究は4月、海に潜り自分た  
ちでウニを獲るところからスター  
ト。その後2〜3日に1度餌を与  
え、週に1度情報共有を行いな  
がら進めている。「今までウニをじつ  
くり見たことがなかったので、餌  
を食べているのを見ていただけで  
もおもしろいです」と高橋七海さ  
ん。現在、餌はだちや豆とさくら  
んぼ。いずれも地域の農家さん  
から、規格外のものなどを提供し  
てもらっている。「だちや豆は  
薄皮を、さくらんぼは種と軸を残  
してきれいに食べるんですが、な  
んか人間みたいでかわいいですよ  
ね」と渡會さんは笑う。  
藻場の減少による生態系の乱れ  
と、農作物を廃棄するためのコス  
ト。漁業と農業における課題解決



万が一に備え、同じ餌を与える水槽をいくつかに分けるなど、リスク分散もしっかりと考えられた飼育環境だった。

を指すこの取り組みは、  
地域の注目度も高い。  
「ご協力いただいている  
農家さんや地域の方々か  
ら、『応援してるよ』とか  
『おもしろい取り組みだ  
ね』とか、声をかけても  
らえることも励みになっ  
ています」と本間さん。  
さらにこの取り組みは、新たな地  
域産品、それに伴う雇用を生み出  
す可能性も秘めている。「全国に  
庄内ブランドのウニを売り出せる  
ように、頑張っていきたいです」。  
柔軟で勢いのある若い力が生み出  
した、産業や世代を越えたつな  
がりは今、地域をゆくりと動かし  
始めたところだ。  
(取材・鶴岡南高芸文部)



だちや豆とさくらんぼを食べるウニ。くわえて離さない姿が、不思議と愛らしい。



## 庄内農業高校

農業と福祉の連携「農福連携」の取り組みが、全国的な盛り上がりを見せている。庄内農業高校でも、地域の高齢者や障がいを抱えている方々とともに自校の農園で野菜を育て、買い物困難者に無料で提供する取り組みを数年前から開始。植え付けや収穫など農場での定期的な共同作業を軸に、収穫した野菜を使って一緒に芋煮会をしたり、商店街のイベントに出店したりとさまざまな活動を展開し、県教育委員会主催の「郷土Yamagataふる



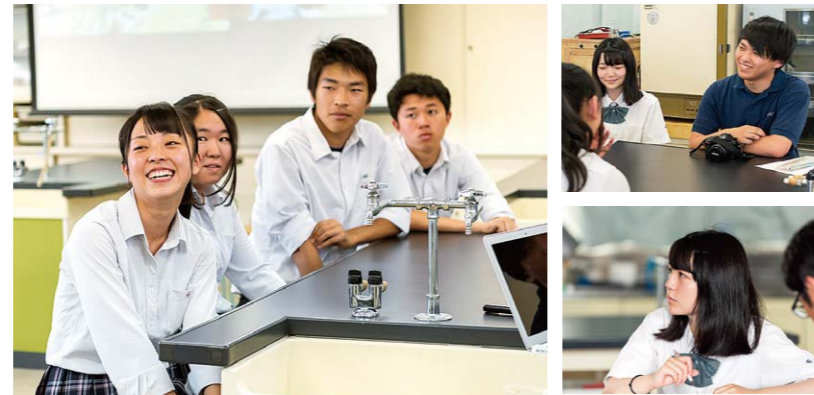
写真提供：庄内農業高校  
毎回の作業は、時折笑い声も混じる和やかな雰囲気だ。



写真提供：庄内農業高校  
商店街のイベント出店と、畑での芋煮会の様子。芋煮会ではかまども自分たちでつくったそう。

さと探求コンテスト」において、大賞を受賞した。今年度、課題研究として活動を受け継いだ4名の3年生に話を聞いた。  
「高齢者の方々の作業が、本当に早くて驚きました」。普段学んでいることを活かして、指導をしようとして臨んだ初回作業の様子を、渋谷美夢亜さんはこう振り返る。「支柱の立て方とか、むしろ教わることの方が多かったです。勉強にもなるし、畑仕事のことだけではなく、いろいろなお話を聞くことができ、楽しいですね」と佐藤瑠杏さんは笑顔を見せる。  
一緒に作業をする高齢者の方にとっては、いい外出の機会でもあ

るようで、「こもりがちになるのを防ぐ効果も期待できると思います」と佐藤汰一さん。急速に進む少子高齢化社会において、「高齢者の孤独死を食い止める力にもなるはず」と渋谷さんが続ける。実際に活動を始めてみて、交流の楽しさや買い物困難者の暮らしを支えること以上の意義に気がつき、少しずつではあるが、やりがいは確実に大きくなってきているという。メンバーの中で唯一、実家で農業を営んでいる八幡勇太郎さんは、発信力の強い活動にしたいと考えている。「庄農祭のようにたくさんの方が関われる活動にし、農業の楽しさや仕事としての魅力発信につなげていきたいです」と



「交流を通じて、いろいろな発見があり楽しいです」と話す(左から)渋谷美夢亜さん、佐藤瑠杏さん、八幡勇太郎さん、佐藤汰一さん。

活かし合うことで育まれる  
地域を愛する心。

力を込める。「私たちも含め、関わるすべての人が出会うや発見ができる場として、育てていきたいです」と瑠杏さんも想いを語る。  
少子高齢化対策として、労働人口流出を防ぐさまざまな取り組みが行われているが、本当に地域を大切に思う気持ちは、誰かに言われることからではなく、「自分が役に立っている、必要とされている」という実感からこそ芽生えるものなのではないか。そしてまた、学びへの強い意志も、このような自らの力が社会に還元される経験により形成されていくものなのではないか。そんなことを考えさせられる時間になった。  
(取材：羽黒新聞委員会)



真夏の暑い日にもかかわらず、たくさんの参加者が集まった。この日の作業は、ナスの収穫や大根畑の草取りなど。

## 編集後記

地域の知らなかった魅力や取り組み、水産高校ならではの研究や成果などを知ることができて大変有意義な時間でした。このように地域の漁業と農業の協力の可能性を広げる取り組みから、地域をいい方向に進めていけるのだなと思い、「地域のためにできることをしていきたい」「私には何ができるか」と考える機会になりました。(鶴南・しゅうせい)

初のスゴハイ取材でしたが、事前に準備していた質問だけでなく、お話の中で疑問に感じたことを質問することでさらに深掘りしていく大切さを学ぶことができました。学校で勉強している内容を、地域の方々との交流に活用し、また自らの学びを深める機会としている取り組み、とても素晴らしいと思いました。ますます頑張っしてほしいです。(羽黒・けいと)

## 編集部員&特ダネ まだまだ募集中!

「スゴハイ」の企画制作をやりたい高校生、「こんなスゴい高校生知ってる」「私、スゴいんです」などスゴい高校生の情報は随時募集中です。お気軽にご連絡ください。

ご応募・お問い合わせ先

Cradle事務局  
✉info@cradle-ds.jp

編集・文=Cradle高校生編集部、工藤 拓也  
写真=間 真由美  
協力=加茂水産高等学校、庄内農業高等学校、  
鶴岡南高等学校、羽黒高等学校